

私と超音波

山近史郎

特別医療法人春回会井上病院 循環器科



[略歴]

1982年 長崎大学医学部卒業、長崎大学第三内科入局
1990年～1993年 米国カリフォルニア大学アーバイン校留学
1993年 埼玉医科大学心臓病センター(第一外科)国内留学
1994年～2000年 長崎大学医学部附属病院第3内科 医員、助手
2000年～2007年 長崎大学付属病院心血管外科、同大学院医歯薬学総合研究科循環病態制御外科学講師
2008年～ 特別医療法人春回会井上病院内科循環器科部長、長崎大学医学部非常勤講師

学生時代や研修医時代に接した心臓エコー検査はMモードが主体であり、画質も現在の機器に比べてはるかに劣っておりますので、心臓の構造を把握することがなかなか困難であり、心エコー検査に対して苦手意識を感じていたように思います。ちょうど研修医を過ぎたころにカラードプラを初めて見た時のインパクトは、とても大きかったことが思い出され、その頃より非侵襲的でいつでもどこでも診断できる心エコーに次第に興味が増幅してきました。

1990年8月に米国カリフォルニア大学アーバイン校(UCI)に同門の先輩である宇都宮俊徳先生の後任として留学し、カラードプラ定量化の研究などを行ってきました。何といても南カリフォルニアの青い空と心地よい気候は今でも忘れられません。Julius M.Gardin教授のもとで心エコーの基礎から応用までたくさんのことを学ばせて頂きました。またその頃、現地で開催されるAHAやACCにおいて日本からの外科エコーやTEEの発表に特に興味を感じるようになり、自分が評価した心エコー所見が手術所見で確認出来ればベストだなあとと思うようになりました。そしてUCIのJonathan Tobis教授宅で行われたホームパーティで日本から来られた尾本良三教授と偶然お話しする機会を得ました。その際に埼玉医科大学で術中エコーをやらせてもらいたいと相談しましたところ快く了承して頂きました。

1993年4月に帰国後、長崎へは戻らずに武者修行のつもりでそのまま秩父のふもとに位置する埼玉医科大学第一外科(心臓病センター)の門を叩きました。そこでわずか8カ月間ではありましたが、多数の術中エコーを経験し充実した日々を送ることが出来ました。「心エコーのゴールドスタンダードは手術所見である。」ことをあらためて実感しました。

またカンファランスの際に尾本教授は「エコーがうまく入らないことを装置のせいにはしてはいけない。」と厳しくおっしゃったことが鮮明に思い出され、今でもそのことを肝に銘じております。当時、「急性大動脈解離例はアンギオは必要なく緊急TEEで十分である。まずはエコー室へ搬送しよう」と許俊鋭先生が言われておりました。それが現在では「すぐに手術室へ搬送し術中TEEで評価する。」ことが一般的となっております。その意味でも術中エコーが確立されたことは感慨深いことです。

私は長崎で偶数月の金曜日に長崎市近辺のDrやソノグラファーらと「長崎心エコー研究会」と称して心エコーの勉強会を行っており初めてから足かけ8年、先日45回を数えました。お茶も出ない草の根勉強会ですが、熱心なエコー仲間が最低でも15人は集まりエコー談議に花が咲きます。診療などでぐったりと疲れた時でもこの会が終わった直後は、マラソンを走り終えたときの様な言いようのない満足感を感じます。まさに充実のひとつときです。現在は着実に超音波検査士も増えてきていますが、若い医師達には超音波検査をソノグラファー任せにはせず、プローブを直接自らの手にとって画像を描き出し、病因や血行動態を考えていく習慣を是非つけて行って欲しいとおもいます。超音波を通して知り合った色々な方々との出会いを大切に、これからも「医療の架け橋」として超音波とともに日々楽しくがんばっていきたいと思います。



(1) Gardin先生と長崎港をバックに (2) 尾本良三先生とグラバー邸で